

# 家庭学習応援だより

## 第8号

早いもので2学期も明後日の終業式となりました。年明けには、4～6年生を対象とした学力診断テストがあります。今年1年間の学習の成果を試す内容になっています。学力診断テストは年1回全県で一斉に実施されるテストであり、児童の理解度や定着度を測ることのできる貴重な機会です。今後の家庭学習に役立てていくためにも、冬休みは1年間の復習を中心に学習をしてみてください。

さて、年末年始は多くの時間を家庭で過ごす時期です。行事も多く、平日とは違った学習の取り組み方が必要になってくると思います。今号では、書籍や学習環境の整え方について紹介します。冬休みは2週間以上あるとはいえ、体感的にはとても短く感じるものです。有意義に過ごすためにはどうしたらよいでしょうか。

## 「勉強好きな子」に育つ家庭環境



### 【得意科目がなければ、学校の時間は拷問の時間】

#### ○ 「文武両道に育つ子ども」の共通点

どれだけスポーツや音楽に秀でた才能を持つ子ども、勉強で「強み」を1つ以上持っているということを指します。1日5～6時間の学校での学習は、得意教科を持っていないと、勉強のモチベーションを維持するのはかなり困難です。例えるなら、泳げない子どもを1日5～6時間プールに入れておくようなものです。座学の強みは1つで十分です。さらに言えば、算数の中でも「計算が得意」や「図形が得意」でも構わないのです。小学校の学習に限っては、教科の一部分でも得意なことがあれば自信につながり、得意分野から発展させて全教科を得意にするのは、実はそれほど難しいものではありません。



### 【小学校時代に「博士」にさせることが、勉強好きにさせるコツ】

#### ○ 得意教科を持たせるコツは、小学校時代に子どもを「〇〇博士」にすること

「〇〇博士」と呼ばれるくらいある分野に精通してくると、子どもは自主的にその分野の知識を深めていくようになります。幼少期の熱中体験は最近になってよく言われるようになってきたので、知っている方はいるかもしれません。付け加えると、賢い親は子どもに「勉強しなさい」「宿題をやりなさい」とは言わないそうです。ただし、自主的に勉強をさせる仕組みを作っているそうです。例えば、小さな子どものおもちゃ箱にブロックやパズル、トランプ、百人一首、ボードゲームなどのアナログゲーム。実は勉強ができる子は、家族でボードゲームやカードゲームで遊んだ経験を多く持っています。小さいころから「思考」をきたえる遊びをたくさんすると、集中力、創造力、予測力、問題解決能力が発達しますから、当然学業にも良い影響を与えます。また、子ども専用の本棚を作り、そこには様々な図鑑がそろっているそうです。図鑑以外では、子どもが好きな本や小説も並べておき、子どもの「好き」を見極めるために本棚を充実させるのが理想と言われています。

## 親は勉強ができるのに「子どもはできない」当然の理由



なぜ世の中には「勉強ができる子」と「勉強ができない子」がいるのでしょうか。考えたことはなかったですか。「勉強ができようになりたい」これは学校に通う年ごろの子どもならだれもが思うことだと思います。もちろん、勉強よりもスポーツや音楽ができるようになりたい人もいます。しかし、わざわざ勉強ができない子になりたいとは思わないでしょう。可能なら勉強もできるようになりたいという思いは、誰もが抱えているはず。

ここで、能力が同じでもそれを生かせる子と生かせない子がいるという点に注目してみます。勉強ができるようになりたいと思うとき、まず思い浮かぶのは学校の成績でしょう。結論から言えば、成績を左右するのは「**学ぶ力**」です。これまで本お便りで使ってきた言葉に置き換えるならば「**学び続ける力(学びに向かう力)**」です。これらは成績を生み出すもとになる力といってよいでしょう。これはいわゆる「知能」とは異なるものです。

まず、最近の研究では、知能に遺伝的要因がかかわっていることは否定できないが、知能には遺伝要因と環境要因がほぼ半分の割合で関与しているという点。

次に、知能がそのまま学業に直結するわけではないという点。知能が高いのに学力はそれほど高くない子がいますが、それをアンダーアチーバーと言い、逆に知能は高くないが学力は高い子をオーバーアチーバーと言います。このこと自体、知能が学業に直結しないことを物語っています。

さて話を元に戻し、「学ぶ力」の重要性です。「学ぶ力」が身に付いていると潜在能力を発揮できるが、身に付いてなければ潜在能力の大部分は埋もれたままになってしまいます。では、「学ぶ力」とは、どのようなもので、どう高めたらよいのでしょうか、となると思いますが、これまで何度も述べてきた「**非認知能力**」と「**メタ認知能力**」などであると言われています。詳しく知りたい方は、本校 HP から本お便りのバックナンバーをお読みください。

## 『勉強麻薬』



↑という面白いタイトルの本が出ました。SNS やゲーム、動画など、スマホは何時間でも楽しめるのに、勉強するのはめんどくさいし、しんどいし、やる気が出ない…。それなら、スマホに依存するように「勉強に依存する状態」を作り出せばいいんじゃない？という勉強麻薬に脳が侵される方法を教えてくれる書籍『勉強嫌いでもハマりする 勉強麻薬』(フォレスト出版)について触れてみたいと思います。

「勉強することがあたりまえになり、勉強に何の抵抗感も持たなくなり、勉強時間を自分から勝手に増やすようになっていくブースト状態」という「勉強依存者」をつくれるという“夢”のような本です。キーワードは、「**情熱**」、「**密着**」、「**達成**」、「**環境**」の**4大成分**から「**勉強麻薬**」は作られるそうです。例えばこの中の1つ、「密着」は「勉強時間は重要じゃない、重要なのは質」という考え方もありますが、これは著者によればこれは間違いで、「たくさん勉強するから質を上げていける」のだといいます。勉強時間を増やすために取り入れたいのが、この「密着」で、ドリル、単語帳、問題集、ノートといったアイテムを肌身離さず、愛着がわくレベルで持ち歩くのがよいそうです。なぜ人がスマホに依存するかというと、日々触れているからであり、「そうであれば、依存したいものを用意して意図的に触れ続けられればいい」というわけです。また、「勉強ジャンキーたちのヤバすぎる勉強法7選」の章は、実践的で参考になるものが多いようです。圧倒的な結果を出したい人はお読みになってはどうでしょうか。

おわりに

先日、経済協力開発機構(OECD)が実施している国際的な学習到達度調査「PISA2022」結果が発表されました。ニュースでも「日本の15歳の学力が向上した」と大きく取り上げられたので、ご存じの方も多いでしょう。コロナ禍を経て4年ぶりとなる今回は、日本が数学的リテラシーにおいて全参加国・地域(81か国・地域)中で**5位**、読解力は**3位**、科学的リテラシーは**2位**の結果でした。前回の調査から、参加国全体の平均得点は低下した一方、日本は3分野すべてにおいて前回調査より平均得点が上昇し、世界でもトップレベルだったそうです。

文部科学省と国立教育政策研究所では、今回の日本の結果について「新型コロナウイルス感染症のため休校した期間が他国に比べて短かったことが影響した可能性がある」と分析しているようです。これはコロナ禍にならなければ気付くことができなかった、「**オンライン授業を家庭で受けるよりも、学校で直接授業に参加したほうが学力は高くなる**」という、ごく当たり前のことに気付かされる結果になりました。

ちなみに、すべての分野で首位になったのはシンガポールです。やはり、シンガポールではコロナ禍においても、小学校から高校まで休校は1日もなかったそうです。子どもたちにも伝えたいことですが、学校での学びをもっと大切にしたいものですね。